保育者の生きがい

堀合文子

〝生きがい〟って何のことだろう。わかっているようでわからない。率直に、平凡に考えれば〝生きがい〟だ。〝生きがい〟―〝生きがい〟、たしかに毎日人間は生きているし、生きているから活動している。が、その活動がはたして世のため人のために何らかの役に立っているのか、また、自分自身生きがいを感じて生活しているのか。ひしひしと生きがい感を感じないだけ幸福なのか不幸なのか。長い人生を本当に意義ある生活をし、自分もそれを自覚し満足している人もいるだろう。その人はきっと幸福なのだろう。〝生きがい〟―〝生きがい〟。生きがいは自分でつくるものなのか、自然とできてくるものなのか、人や社会がつくってくれるものなのか。わからない。ともかくむずかしい。

保育者の生きがいは……

世の中で、保育者という仕事は意義ある仕事ということは万人もみとめ、私もみとめるところだ。保育者ということは教師だけに限らず、母親もその一員であることはいうまでもない。また対象の幼児もさまざまな幼児がいて、保育者はそれぞれ与えられた天職としてそれぞれの道にはげんでいる。特殊幼児（身障者など）を指導しているので〝生きがい〟を感じる、というわけでもなく、普通児、優秀児の指導でも〝生きがい〟は感じる。

保育者が〝生きがい〟を感じる時、一般論でいうことはやすく、かつ、一番保育者として大切なことで、これは他の方も話してくださるだろうから、幼児がこのようにした

時、指導がこうであった時が生きがいだ、などなど、私は省略する。

また幼児と保育者の日常は大へん忙しい。身体も精神も。そして、日常生活の中に保育者の〝生きがい〟は終始あふれているはずだ。もちろん、その〝生きがい〟感は、ああ生きがいがあるというものでなく、むしろ感じない場合が多く、その中にひたりきってしまい、事態によっては悲観、困惑、悩みと〝生きがい〟感から脱してしまう場合がある。でもそれが人間の生きがいではないだろうか。起伏のある人生、それが人間の人生で、それだから人は生きがいを感じるのではないだろうか。保育者の生きがいもそこにあるのだろう。

保育者は自分がこのように生きがいを感じたとしても、はたして幼児に生きがいを与えているだろうか。

幼児の生きがいは……

いうまでもなく幼児の生活はあそびの生活である。幼児はそのあそびの生活を充分に活動し、味わうその中で学ぶ時に幼児は喜びを感じ、生きがいを感じている。

幼児のそのあそびの生活を、おとなの教師が、教師の教育的意図とか、研究の結果とかをふりかざして、無抵抗な幼児、従順な幼児を教師の考えにのせ、幼児の生きがいを阻止しているのではないだろうか。教師は自分の計画なり方針の満足感から、幼児の生きがいをつぶして、教師自身の生きがいをそこに見いだしているのではないだろうか。また幼児期は大切と、文字だのおけいこだのと極端な指導も、幼児は赤旗一つふらずに従順に教師についてゆくかのようにみえる。幼児はそれでも生きがいをどこかに見いだそうと努力し、与えられた課題を幼児なりにたのしくうれしそうに生活すると、教師やおとなは、あの中でも幼児はたのしそうだ、生きがいをもっていると、勝手な解釈をしている。赤旗のふれない幼児は、顔色や暴力、性格へとその抵抗はのび、本当の優秀児や有望児として育つ幼児が、教師の意にそわないため、ついに〝問題児〟とのレッテルをはられてしまう。

また「幼児は自由にあそばせてこそ」と、自由にあそばせることは理解した教師も、〝よくあそんでいる、よくあそんでいる〟といって、教師は傍観者で、または自由だけしかない生活をよしとして、現在の幼児の生きがいはあってもその生きがいは一瞬一瞬消えてゆく生きがいで、将来、生きがいをもって生活する人には成長しない生きがいである。

グロースやホイジンガのいうように、無償の遊戯的活動こそ文化的活動の芽ばえる母胎と考えられる。とは神谷美恵子著〝生きがいについて〟の一節であるが、〝岡潔の偉大なる数学者も、少年時代蝶々とりや箱庭あそびで経験した喜びを、のちに数学という高度の知的活動のなかに見いだした〟とつけ加えられている。

幼児の生きがいをつくることこそ、保育者の生きがいであり、保育者の使命ではなかろうか。時代は移る、社会は変わる。環境もかわる。その中で育つ幼児も変わる。そして幼児は、一〇〇人いれば一〇〇人みなちがう。一時に、全員に、同じ事項で、なんで幼児一人一人に生きがい感をもたせることができるだろうか。

保育者は、一秒一秒、その幼児一人一人について生きがいのある生活をさせるために、頭を働かせ、考え、判断し、行動しなければならない。保育者は常に教育を創造していなければならない。

これが、幼児教育における保育者の生きがいではないだろうか。もちろん、幼児も生きがいを感じて幼児期の生活を満喫するだろう。

私の生きがい

私もはずかしながら保育者の末席をけがしている。この課題をいただいた時に、私は生きがいを感じて生活しているかしら、生きがいを感じたかしら、とはたと、疑問をもった。

私も大正生まれの人間なので、ただ夢中ですごし、私に与えられた天職と思って、幼児の前に出れば使命感を感じ、夢中の一語で過ごしてきた。おそらく保育者の方はみな、幼児教育がやりたい、すきだという発端から発し、おそらく一つ一つに生きがいを感じていられる方が多いであろう。たまたま、私の発端はなさけないかなそのようなものでない。私（大正生まれ）の成長期は、旧式と名のつく家庭にあって、〝女が学問をすると高慢になる〟と大反対をうけ、また女のはいる大学もない時代。こんな環境に反発して、女学校を出ると、どうしても勉強がしたくて最低短い期間の学校生活をやっと許されたのが今日の運命。喜びをもったというよりその喜びは学問ができるという喜びだった。そんなこんなで運命は幼児教育に私をのせた。こんな私なので生きがいは保育者というより、勉強することで、頭の中でいろいろ考える時私は一番たのしい。

幼児教育者は、心理学者、哲学者、科学者、数学者、文学者、またピアニスト、声楽家、舞踊家、画家などの芸術

家、そして医学の心得ももち、以上のような素養と学問をもっていることが理想だと私は信念をもっているので、できないながらそこに到達しようと努めている。自分より遠い理想だが、それにむかって毎日を過ごすことが私にとって大へんたのしく希望がわく。これが私の生きがいなのだろうか。他の保育者とは発端がちがい、幼児と接している時、または接したことによる生きがい感はないので、時おり静かに考える時、私は幼児に申しわけなく、幼児にとって偽善者的教育者だと考えてしまう。夢中の一語の中に幼児と生活し、こんな私が、幼児の教育をしてよいのか、恥ずかしいと共に幼児に申しわけない。

現在ささやかながらはげんでいることは、私にとってはささやかな〝生きがい〟だが、それがある程度実った時に、私は保育者としての生きがいをはじめて感じるのではないだろうか。

一生かかって私は保育者の生きがいを私なりに感じることができるかどうか。今は私の小さな小さな〝生きがい〟の中に生きている。この小さな〝生きがい〟が実って保育者の生きがいになるには私の人生はたりない。これらの学問と素養は、保育者が勉強し、身につけても幼児の前にそのまま出すのではない。学問をしたから、勉強をしたからというえらい保育者ではない。これだけの勉強をしていれば幼児の前にそのまま出すことはほとんどなく、その人からにじみ出るその力、にじみ出る能力になるだろう。幼児の前にはみる目もたのしそうな、そして幼児にとってよき友、よき母、よき姉、よき兄、よき師であり、そして指導にあたっては、その必要に応じてそのつど考えていく脳の力。立派な高度な学問をもっていてもその力をふりかざすのでなく、もっていることが身からにじみでるいうにいわれぬよい幼児教育をする、こんな保育者になれた時、私は幼児教育に本当の〝生きがい〟を感ずるだろう。

今は、自分で学び、考え、小さな生きがいの中で生活している。大きな生きがいを前においてい。幼児に本当に申しわけない。少しなりともそれが実現した時に、私は人なみの幼児教育に生きがいを感じる保育者になれるだろう。時おり、私はすまして幼児の前にでている自分がなさけなく、幼児に心の中でわびている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）